

神武東征譚の背景を考える

北條芳隆

1. 景観史学からの考察

ここでいう景観史学とは、考古学や古代史学の手法を駆使しつつ、過去の人々は周辺景観とどう向き合い、意味づけを与えたのかを考察する学問領域である。最近では各種の地理学的情報処理技術が進展しているので、地殻変動や火山・地震災害、あるいは土砂災害の発生年代を考察に取り込むことが容易であるし、過去の天体景観を高精度で再現することも可能である。こうした現在の知見を積極的に取り込みながら、日本神話の構造と背景を考える。今回は神武東征譚を主題として景観史学からの考察をおこないたい。

2. 日の出暦の問題からみた神武東征

弥生文化は水稻農耕を基軸に据える。それゆえ系統立った農事暦を備えることは不可欠であり、故地の中国側で準備された暦の体系が簡略化された形で日本列島に渡来した可能性は高い。中国の山東省渭水流域の水稻栽培を採録されたといわれる最古の農書『齊民要術』などをみると、稲粃を水に浸す指標は春分であったことがわかる（最終頁の附表）。

では春分はどのような手法で定まったのか。当時の基本的な手法は年間の太陽の出没地点を記憶する日の出暦ないし地平線暦であったと考えられる。となると日の出の北限である夏至の太陽の出現地点と南限である冬至の太陽の出現地点を記憶しておき、両者の中間点からの日の出を迎える春秋両日をみなし〈二分〉とする手法であった可能性が高い。

(1) 弥生前期段階における日の出暦の移設

その初期段階の様相は福岡県板付遺跡で復元される(図1)。縄文晩期の夜白式期の遺構から日の出暦を再現すると、二分の定位に前後3日の誤差が生じた可能性がある。しかし板付I式期の前期環濠の中心からだと、夏至－冬至間の中央値は、現在の定気法にもとづく天文学的な意味で

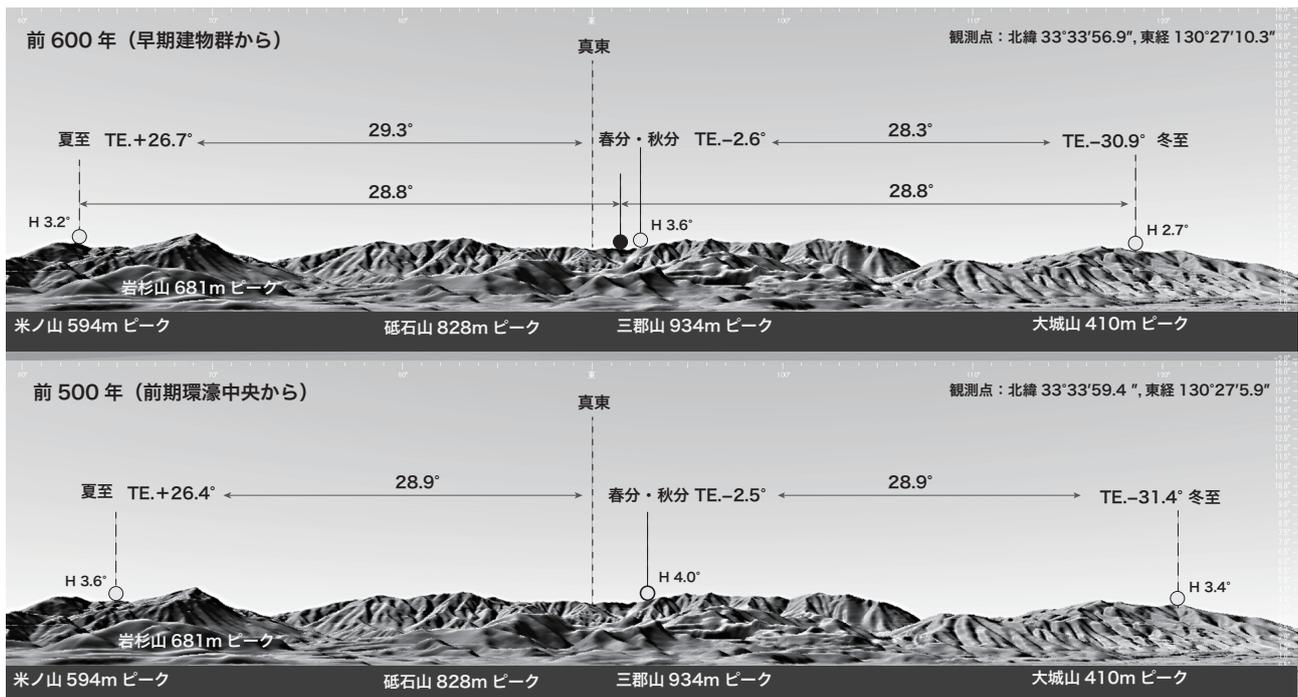
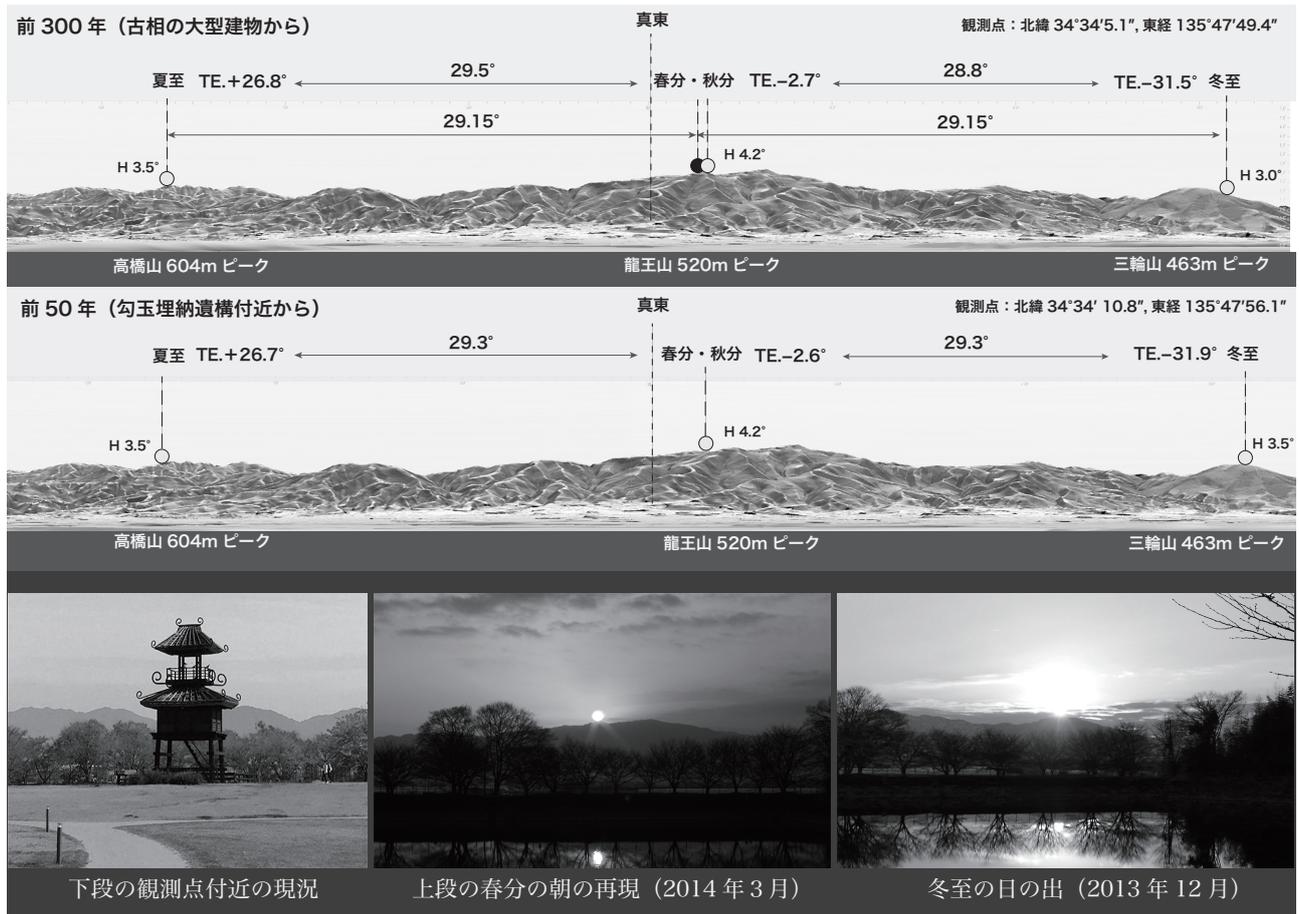


図1 板付遺跡からみた紀元前 600 年と 500 年における年間の日の出



(写真は筆者撮影)

図2 唐古・鍵遺跡からみた紀元前300年と50年における年間の日の出

の二分となる。偶然の一致ではありえず、年間の日の出を数十年間にわたって定点観測し続けた結果、最も相応しい地点を前期環濠の中心点として選んだのだと推測される。つまり弥生文化の本拠地では日の出暦にも精度の向上が図られたことがわかる。

こうした板付側で醸成された日の出暦の枠組みは、そのまま奈良県唐古・鍵遺跡に移植された(図2)。ここでは龍王山520mピークを〈二分〉の指標の峰と定め、夏至の指標を高橋山に、冬至の指標を三輪山に定めたのである。この遺跡の場所を選んだのは在地の縄文文化人ではなく弥生水稻農耕民であり、上記の三峰を年間の節目となる日の出の指標に選んだのも入植者側であった。こうして奈良盆地全体を流れる時間は弥生文化側の支配下に入ったのである。

(2) 古墳出現期における日の出暦の移設

日の出暦の枠組みの移設は古墳出現期にも再度発生した。それが伊都国の本拠地、福岡県三雲遺跡から奈良県纏向遺跡への移設である。ここでのキーワードは平原農事暦であり、のちの祈年祭と神嘗祭の原型となる春秋一対の重要な稲作祭祀であるが、この時代の伊都国では後漢代の中国暦法の二十四節気が抜粋的に導入され、平気法の雨水(正月中気、2月21日ーユリウス暦表記)と霜降(九月中気、10月22日ー同)の両日の日の出は日向峠からとなるが、平原1号墓の東に立てられた大柱から延びる朝の最初の影が墓の中心を貫く仕掛けが作られていた。

この点をふまえ纏向遺跡大型建物Dからみた日の出暦を再現すると、雨水と霜降の両日の日の出は平原1号墓からの情景と酷似することが判明する。

龍王山の山並に近接した場所に築かれた建物なので、ここから見る三輪山は立春(正月節)と立冬(十月節)の指標へと転じ、〈二分〉の指標は巻向山となった。そして平原農事暦は、三輪

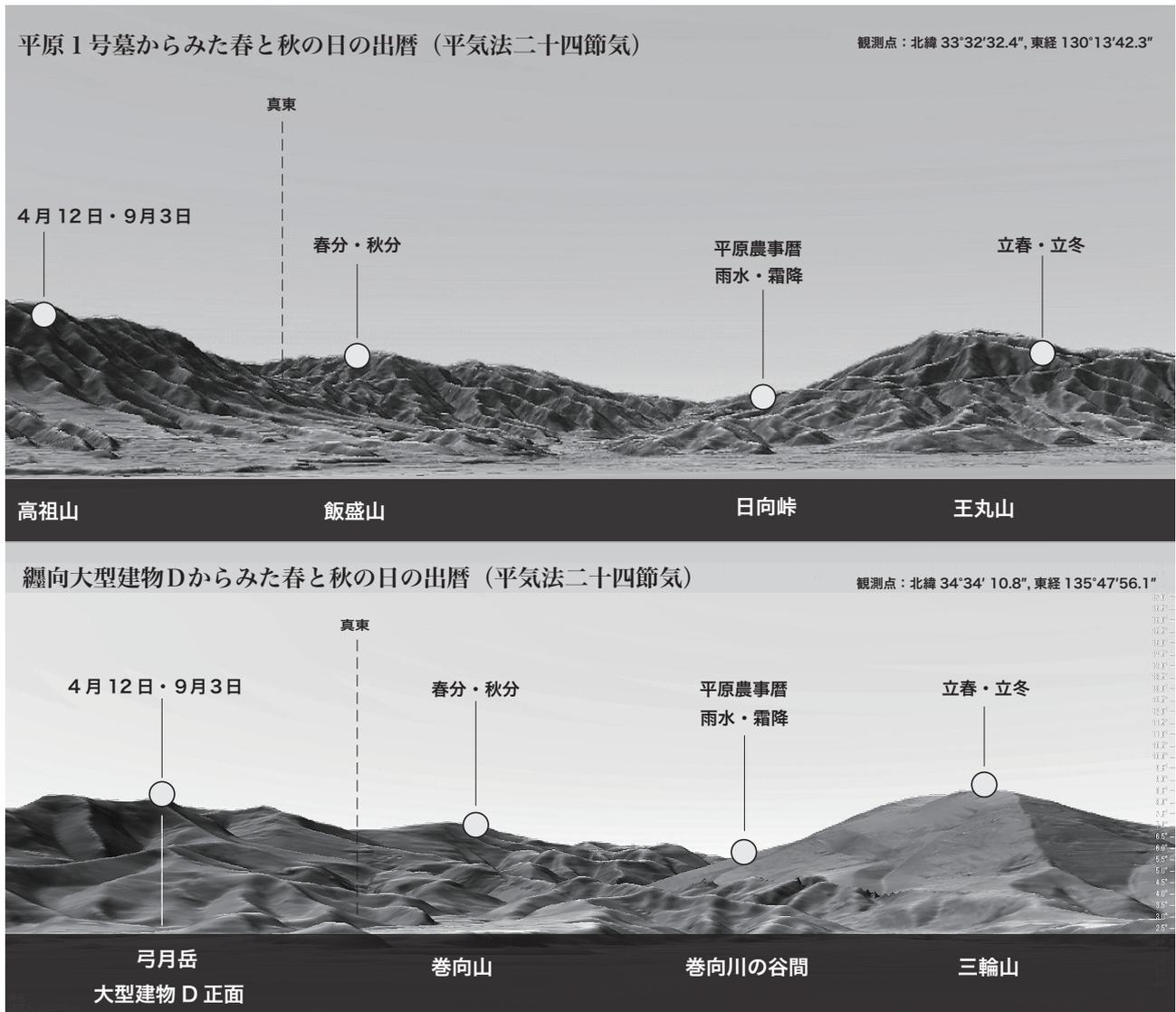


図3 伊都国（平原1号墓）と大和国（纏向遺跡）からみた日の出暦

山の北斜面と巻向山の南斜面とが接する纏向川の谷間からの日の出となる。雨水と霜降の両日は印象深い日の出の情景として把握されただけでなく、指標となる山並の情景も酷似するのである（図3）。

ようするに大型建物Dからみた纏向川の谷間は日向峠に擬され、雨水と霜降の指標になったと断定できる。同様に三輪山は王丸山に擬され、龍王山は高地山と高祖山になぞらえられた。こうして平原農事暦を含む新たな日の出暦が旧伊都国から大和国に転写されたのである。年代的な先後関係からみて逆はありえない。

（3）二回起こった神武東征

日の出暦の枠組みが北部九州から奈良盆地に移設される現象は、弥生文化における前者の先進性を物語っている。ただし今回取り扱うのは暦すなわち時間の支配にかかわる問題なので、非常に重要な、政治性を帯びる要素であったことも確実視される。

日本考古学では神武東征譚の評価について、弥生文化が西から大和に伝播したことの遠い記憶だとする1950年代の小林行雄説がある。もちろん、それは神話にすぎず虚構だと処理する傾向は依然として優勢である。積極的な発言としては、筑紫ではなく吉備からの東遷の可能性を指摘する近藤義郎説が目につくにとどまる。

その一方、古墳出現前夜に発生した神武東遷邪馬台国大和説と絡め、史実性を強調したのは平原1号墓の発掘者原田大六であり、森浩一が賛同者であった。近年では寺沢薫が北部九州地域の優位性を再点検し、吉備や東部瀬戸内から大和への影響力を加味した考察を行っている。

上記の小林説と原田説は一見対極におかれるかに見えるが、今回の作業結果は、両説ともに十分な考古学的な証拠によって裏付けられること、すなわち史実を背景とする神話の枠組みであった可能性の高いことを再確認することとなった。つまり神武東征は弥生文化の拡大期と古墳文化の発生期の両局面において都合二回にわたり発生したのだといえる。古墳文化の成立過程における筑紫勢力の関与を再評価すべきであることはいうまでもない。

3. 大和における古相段階への復帰

上記のような経緯のもと奈良盆地に転写され、初期倭王権が採用することになった日の出暦であるが、纏向遺跡が衰退し始める布留1式期以降にこの近隣で継承された形跡は確認できない。むしろ明確なのは、西殿塚・東殿塚古墳を配列上の頂点とし、箸墓古墳を南端に据え直す大和東南部古墳群の本格造営が始動した時期との一致である。

この古墳群は龍王山520mピークを背景の頂点に据える造墓空間設計なので、それは唐古・鍵遺跡からみた日の出暦を象徴化する志向性にほかならない。とくに本古墳群の最終段階で築造された北端の西山古墳の軸線が高橋山を向く事実は特筆される。伝統への回帰を証明する事象だからである（図4）。

さらに三峰の山裾には、北から石上神宮、倭大國魂神社、大神神社の三社が配された。高橋山の頂上付近にある磐座は石上神宮の元宮だったとの伝承が残り、三輪山は大神神社の神体山として禁足地となっている。つまりこれら三峰がのちの時代に「御諸山」や「三諸山」として聖山となり聖域ともなった事実は、奈良盆地に最初に移植された日の出暦の枠組みへの回帰が古墳時代前期に起こったことを意味するのであろう。ここには纏向遺跡や箸墓古墳に顕著な筑紫勢力や吉備勢力からの影響力を無効化する意図が伴った可能性も高いと私はみている。

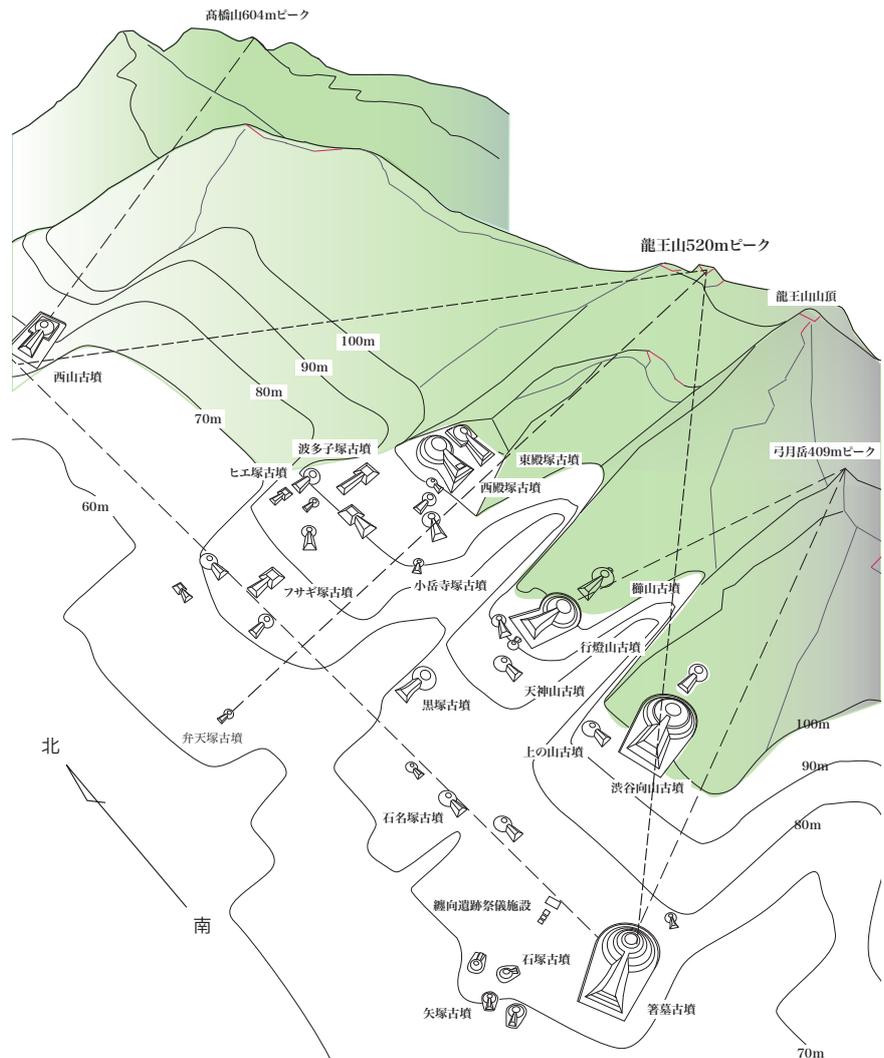


図4 大和東南部古墳群の配列

4. 景観史からみた神話と考古学

(1) 火山信仰と祖先祭祀

文献史学の保立道久先生からは、古墳祭祀が火山信仰と深い関わりをもつ可能性を教えられ、私も考古学的な観点からの再評価を試みた。その結果、古墳祭祀の起源だといわれる岡山県楯築弥生墳丘墓は、被葬者を昇に転生させ昇龍させる舞台装置であったとの結論を導くに至っている（図5）。火山列島でもある日本列島の場合、山中他界観の延長線上に火山への信仰は必然化した可能性があり、祖先祭祀とも結びつく。

この点については佐賀県吉野ヶ里遺跡の北墳丘墓が雲仙普賢岳を正面観に据える現象からも説明可能であるし、火山活動の活性期を迎えつつあった富士山に、前方後方墳の軸線に向ける静岡県富士宮市丸ヶ谷戸古墳は、火山信仰と古墳祭祀が密接不可分の関係にあったことを如実に物語っている（図6）。さらに被葬者の遺骸を船に乗せ、その魂を前方部から飛翔させて富士山から立ち上る噴煙に沿わせ昇天させようとする意図は、埼玉県埼玉稲荷山古墳で確認できる。



図5 楯築弥生墳丘墓と火山祭祀



図6 丸ヶ谷戸古墳と火山祭祀

古墳祭祀と火山信仰との深い結びつきは、記紀神話の構造を考察するうえでも有益だと思われる。神武東征の前段階には、海幸彦・山幸彦伝承（後述）をはさみ、天孫降臨譚があるが、それは火山への降臨であった。仮に古墳祭祀が被葬者を龍に転生させる意図を帯びたとするなら、あまたの昇龍祭を経たうえでの降臨なので、理屈の上では天孫を支えつつ降臨した神々の正体は龍に転生した歴代の祖先霊となる。少なくとも火山への降臨譚が語られる背景には、そもそも火山からの昇龍が祈念された、という過去の営為との関連や連想があったとみるべきではなかろうか。

(2) 海幸彦・山幸彦伝承の重要性

それ以上に重視すべきは海幸彦・山幸彦伝承であろう。この伝承は、皇祖が龍宮の主からも守護される、超然的な力を帯びる経緯を語ったもので、海上他界ないし海中他界からのパワーを憑依させる政治的志向性を背景とするものであった。つまり天界からの降臨だけでは不十分で、皇祖は海中からのパワーをも身に帯びることによって初めて、葦原中国を永続的に支配する有資格者たりえたのだといえる。

記紀神話の編者たちにとって、あるべき皇祖とはそのような存在だったから、降臨の舞台は西に高千穂の峰を望み、東に豊後水道を控える日向が選ばれたのであろう。

(3) 考古学的な状況証拠

考古学的にみれば、豊後水道は弥生時代中期の段階において、琉球から南海産の貝殻が持ち込まれる第二の「貝の道」であり、到達点は吉備の岡山市南方遺跡であった。つまり吉備の弥生人は遠く琉球から持ち込まれる情報に通じ、経路上にある有数の火山の情報にも接していたのである（図7）。

現実の火山がいかに恐怖の対象であるかは、現地の人々にしか実感されないが、非火山地帯の住人であれば、そのパワーにあやかるとを思いついたとしても不自然ではない。だからこそ、人工の火山と噴火口をしつらえ、そこからの昇龍祭を構想した可能性がある。

古墳時代前期の有力者層の埋葬における主要な副葬品は青銅鏡と腕輪形石製品であった。前者が文明側の象徴だとすれば、後者は異界側の象徴であった。さらに前者を天界の象徴に据えれば、後者は龍宮の象徴に据えられる。

つまり初期倭王権が日本列島全域の支配権を主張するさいには、文明と異界の双方の象徴性を身に帯びることが必須の要件だと構想された可能性が指摘できる。記紀神話にみる北方系と南方系の錯綜は、じつは古墳時代前期に実演された、双方の象徴性を同期・同調させる試みとその正体であった可能性を物語っている（図8）。

ただし青銅鏡と腕輪形石製品の祖型となった南海産の貝輪を墓への副

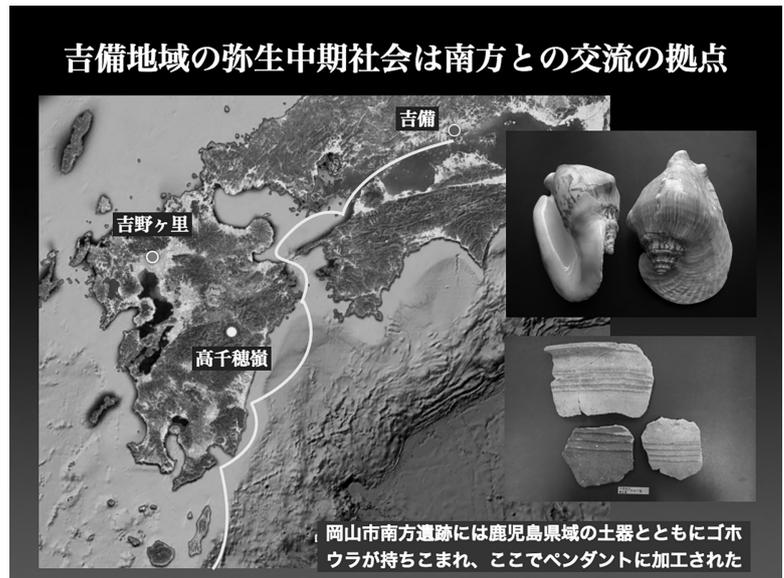


図7 弥生時代中期の豊後水道貝の道



図8 文明の象徴と異界の象徴との同期・同調

葬品として最初に採用し、それぞれの財を他界の象徴として意味づけたのは北部九州地域の弥生時代中期、甕棺墓の社会であった。その意味では、筑紫で実践された過去の遠い記憶を蘇らせ、吉備で新たに構想された人工火山に文明と異界の象徴性を挿入させる営みが前方後円墳の祭祀であったともいえよう。

【参考文献】

北條芳隆2022「高千穂の峰と前方後円墳の祭祀」『神話の源流をたどる』KADOKAWA

北條芳隆2024「二至と二分を重視した弥生時代の日の出暦」『物質文化』次号掲載予定

北條芳隆2024「稲作暦と稲東からみた古墳時代の成立過程—景観史と経済史の視点から—」『島根考古学会誌』次号掲載予定

付表 水稻農事暦（抜粋）

表1 中国山東省の6世紀代水稻作季と日本列島の近世の稲作時期

| 地域 | 年代 | 品種 | 浸種・播種 | 田植え | 刈取り | 典拠 | 出典 |
|------------|---------|---------|------------------------------|--------------------------------------|---------------------------|--------------------------|-------------|
| 中国山東省 | 6世紀 | 記載なし | 三月を上時、四月上旬は中時、同中旬は下時（4月～5月） | | 霜降（10月下旬） | 『齊民要術』（6世紀北魏） | 西山1949文献 |
| | | | 冬至後百十日後種稻（3月末） | 三月に稻を蒔く、五月に別種、夏至後二十日を過ぎれば不可（4月～7月上旬） | | 『齊民要術』（7世紀北魏） | 農業出版社1961文献 |
| 佐賀藩・諫早地方 | 1843以前 | 早・中 | 春彼岸に浸種、三十日後に揚げ七・八日後苗代に蒔（4月末） | 春土用過より四拾日後に植える（6月初旬） | 秋彼岸より二十日過ぎて初初（10月10日以後） | 『郷鏡』（天保14年写,1843） | 嵐1975文献 |
| | 1843以前 | 晩 | 春彼岸に浸種、三十日後に揚げ七・八日後苗代に蒔（4月末） | 六月土用二十数日前（6月25頃） | 秋土用過ぎて二十日で刈（10月下旬） | 『郷鏡』（天保14年写,1844） | |
| 対馬・佐須 | 1722以前 | 記載なし | 彼岸終りに浸種、二拾日余に蒔日干して蒔く（4月中旬） | 夏至の前後拾日間（6月中下旬） | | 『老農類語』1722 | |
| 対馬・豊崎三村 | 1722以前 | 記載なし | 春土用の中過ぎ（4月下旬） | 上田は梅雨中頃（6月下旬）、中下田は梅雨初（6月中旬） | 九月節の初頃（10月上旬） | 『老農類語』1722 | |
| 対馬・伊奈二村 | 1722以前 | 記載なし | 八十八夜頃（5月初旬） | 半夏生の数日前より植始（6月下旬） | 秋土用中頃（10月下旬） | 『老農類語』1722 | |
| 肥後全般 | 1821～43 | 早稲 | 二月播種（3月） | 四月下旬（5月） | 八月 | 『肥後国耕作聞書』1821・22・43 | |
| | | 赤物（太唐米） | 三月上旬（4月） | | | 『肥後国耕作聞書』1821・22・43 | |
| | | 中稲 | 三月上旬（4月） | 四月下旬 | 八月から九月下旬まで | 『肥後国耕作聞書』1821・22・43 | |
| | | 晩稲 | 三月上旬（4月） | 四月下旬 | 十月十五日まで（11月下旬） | 『肥後国耕作聞書』1821・22・43 | |
| 南予（愛媛） | 17世紀 | 早稲 | 二月彼岸「二月」（3月下旬） | 四月初から二十日「四月」 | 六月末から七月初「七月」 | 『清良記』*「」内は『四季作物種子取事』17世紀 | |
| | | 中稲 | 三月初「三月」 | 四月末「四月・五月」 | 八月末「八月・九月」 | 『清良記』*「」内は『四季作物種子取事』17世紀 | |
| | | 晩稲 | 三月中「三月」 | 五月中節前「五月」 | 九月初「九月」 | 『清良記』*「」内は『四季作物種子取事』17世紀 | |
| | | 野稲 | 三月初「三月」 | 直播-四月 | 記載なし「九月」 | 『清良記』*「」内は『四季作物種子取事』18世紀 | |
| 安芸藩（広島）加茂郡 | 19世紀か | 早稲 | 二月中から三月節入 | 五月節入から夏至 | 八月彼岸前後（9月下旬） | 安政年間『国郡志』19世紀 | |
| | | 中稲 | 三月節入より数日過より三月中 | 五月中から半夏（6月下旬～7月初旬） | 九月節入から秋土用（10月上旬） | 安政年間『国郡志』19世紀 | |
| | | 晩稲 | 三月土用半ば過より四月節入 | 五月中過より六月節（6月上旬～7月上旬） | 九月土用入から霜月節入（10月下旬～11月上旬） | 安政年間『国郡志』19世紀 | |
| 河内中部（八尾） | 1842以前 | 早・中・晩共通 | 二月彼岸種籾浸、春土用播種 | 五月一日田植え | 寒露過早稲刈、九月二十五日中稲刈、同二十九日晚稲刈 | 『家業伝』1842 | |